

中  
畑

小針家祖先のあゆみ

矢吹町教育委員会  
矢吹町文化財専門委員会

# 発刊に際して

矢吹町教育委員会教育長

小 林 重 孝

当町、中畑の小針家（現当主弥太郎氏）は近郷にきこえた名門として、矢吹のみならず地方史をかたる上では、欠くことの出来ない家柄である。

その祖先は古く永禄以来連綿として続き、農村民の代表としてその職責を果され、中でも十二代豊章（周平）の代、文政十年八月幕府直轄領（浅川陣屋）八十五ヶ村（石川・田村・白川郡）の窺乏を訴えるため代表二名遠く江戸に赴き時の將軍十一代家斉に直訴の機をねらっていたが、將軍の外出はざらにあるものではなく二十日余の日を送ってしまいやむなく老中筆頭大久保加賀守忠直の江戸城への登城を待ち駕籠訴し即刻召し捕えられるも訴状は取り下げとなり遠山左エ門尉（よくテレビなどに出る人の前代）の取調をうけ無罪となり国元へ帰ることになったが、もしこの訴状が取り上げになった場合、当時の法律として本人のみならず一家ごとごとく磔の刑に処せられるところであった。これは幕府としても諸般の事情を考慮し（一揆など）情をかけ音便なとり計いとなったものでまことに危険なことであった、時代とは謂え、その犠牲的な行為には驚く外はない。

今、町が町史の資料編の作成にあたり同家文書が貴重なものであることは言を待ないとこそであるが、“小針家祖先のあゆみ”の発刊にあたり心から敬意を表するものである。



陸奥のこかねの原の中畑の松かんむれる周平の門

色変ぬ軒端の松乎志るべにて昔の宿に我は来にけり

色替ぬ松に詩歌のたくみかな

五百枝さし茂れる松の色深み猶千代かけて栄行くらん

千代かけて春の光や磨くらん美登りそひ行く庭の玉松

小針氏賀千代の駕雅志とたとほきて朝よひめづる庭の笠松

君が代の恵かゝふる笠松のちとせのかけを仰きてそ見る

うつろはて茂る岡辺の常磐木の若葉の色を何といわまじ

年毎に色添ふ松のためしにてひらくる業のやすくもあるかな

末ながく栄よかしとなひく枝はみどり色ます周平の松

老樹にも若葉をみせて茂る枝の色も変らぬ周平の松

周平の松の緑は千代かけてかわらぬ色の茂るなりけり

この宿の松の葉ことに千代こめて代々の栄はかきり知られず

凌雲勢何牡 老蓋色蒼々 屋潤春宵露 鶴栖冬季霜

天晴龍吟静 陰定月光長 幾度経風雪 千古永不墮

詠松為小針翁雅属

江間政発

源康濟

文直

文直

錦子

時叙

令意

重喬

撰空

撰空

行方原上淨無塵

堪羨一家魚水親

不變青蒼千歲色

周平松頂鶴聲頻

隈川 中 村 直 敬

老松幡居雅園中

翠綠清吾造化エ

樹上時肝昇旭日

光芒赫々一堂充

辰正月四日訪西白河郡中畑村宿於小針氏邸

邸内有老松齡三百歲則記感贈之 河東田紫泉

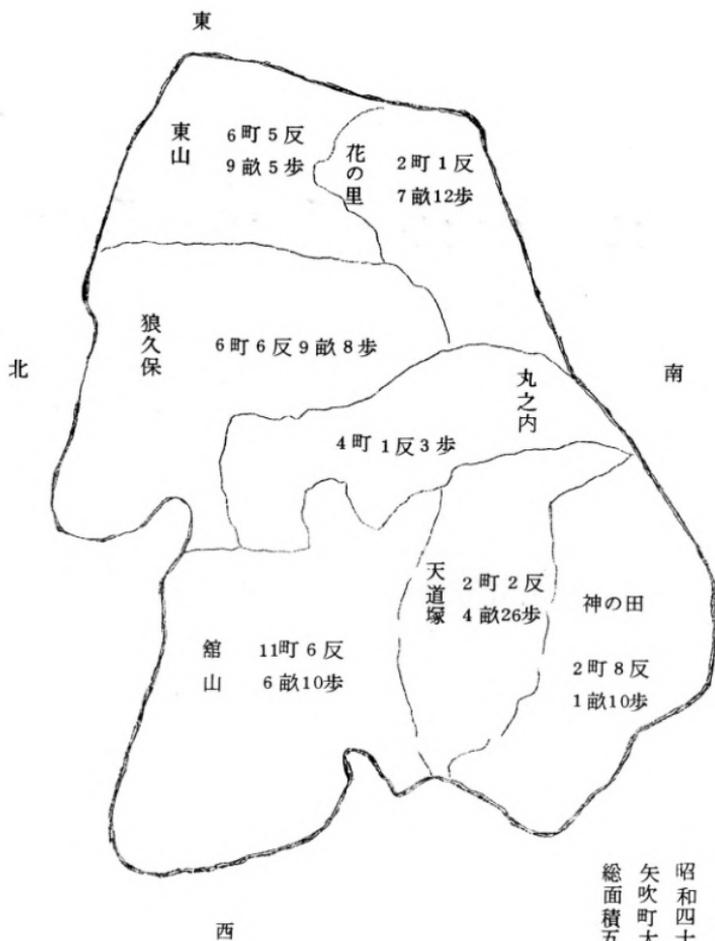
(教 美)

矢吹史跡めぐりに参加して

横 川 白 水

山道の落葉踏みつつ息せきて

登れば展く物見館跡

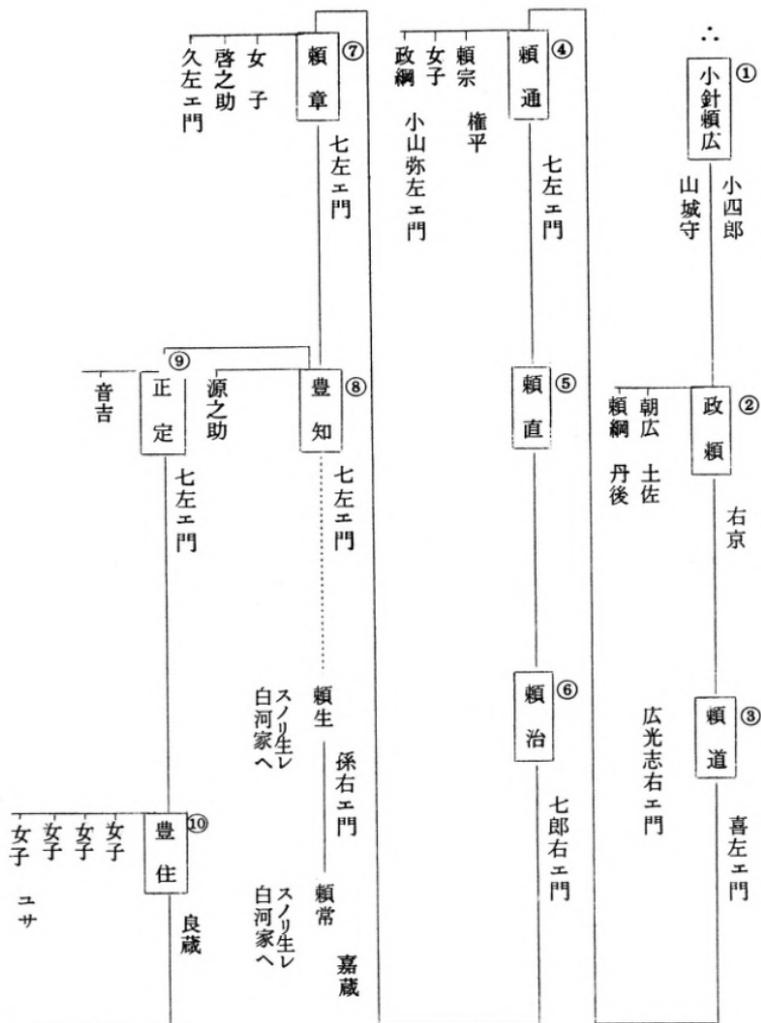


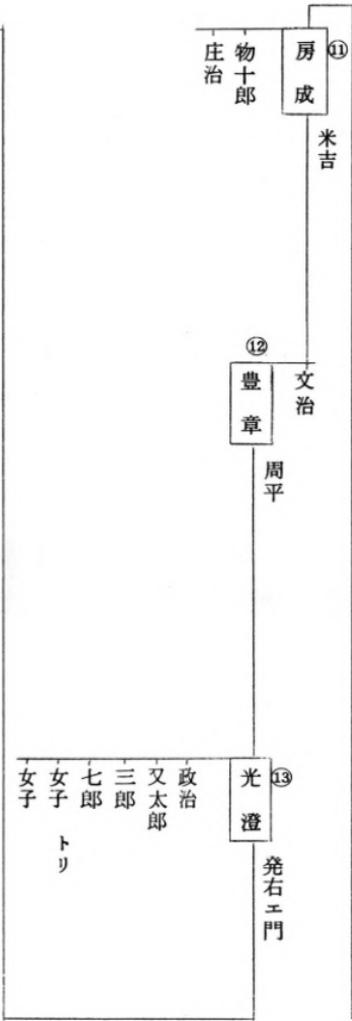
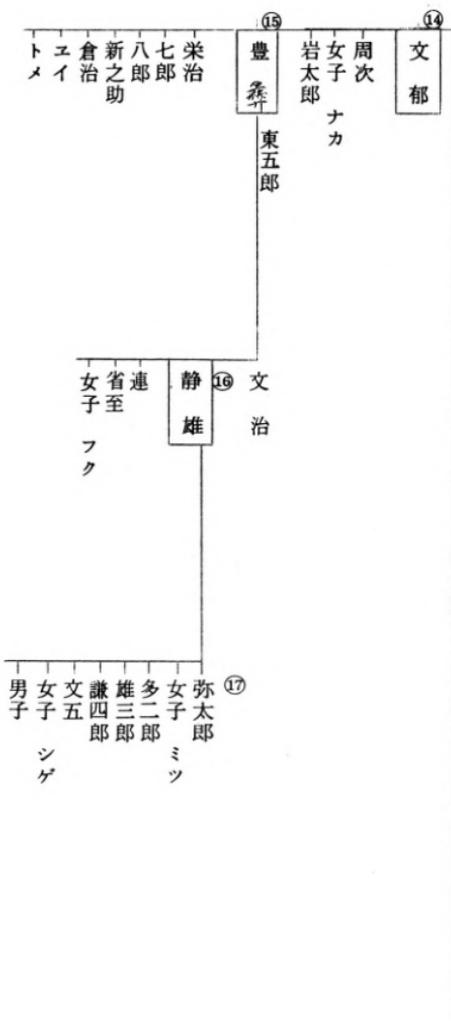
物見館址

昭和四十五年矢吹町役場調

矢吹町大字須乗ニ在リ

総面積五十四町六反八畝十四歩





昭和三十五年六月 十二月迄毎月連載小説（週刊誌）中山義秀著中山七里の中心人物小四郎は白河義親の異母弟とあり、この小四郎は関西方面をマタに掛け途方もない乱暴物の様であるが実際は左にあらざる穩健であった。白河小四郎は白河晴綱の臣徳長某の娘を妾として三人の子を生んだ、上二人と三人兄弟であった。上の女は大関信濃守に嫁し次の女の子は御南（オナミ）と呼んで他は一切判らぬ、三人目は白河小四郎と云い先祖の名を貰い受けた。つまり白河義親の異母弟である。

永禄十三年（元亀元年）那須家と白河家との間に戦いがあり会津芦名も兵をくり出し物凄い戦となった。白河晴綱の庶子白河小四郎は十三才に成って居り戦争見物に四騎を随いて出掛けた。道にまよい山の中を歩く中に敵多人数に見付かり四人の郎党は切り殺されて小四郎だけは馬から引きつりおろされて生捕りに成ってしまった。この戦の和解の後小四郎は返されて来たが赤館の館主鹿子木某に預けられてしまった。

小四郎は元服して小山小四郎を名乗り祖先の名ほしいまゝにした。天正元年の頃滑津村小針館主となり小針山城守頼広と名乗り家来も追々集められた。館の低い所に本丸があり周囲は内堀で囲まり約二反歩位の広さがあり館全体で二十町歩位あり外濠が囲らされて居た様である。

何人が居ったものやら不明である。

祖父の徳長も頼広養育の為に来り住し小針筑前守と称した様である。

出陣の時を考えて館外に八龍神の祠を作り祭ったもこの時であり小針館に入った頼広は早速旗印とか馬印とかを始めた模様なるも現在判明しているのは馬印位のもので「浅黄地、長さ四尺二寸巾二尺八寸ツマ白黒ノマリ」のものである。

家来も大変成績がよく集まった模様である。永禄三年には水戸佐竹義宣が大軍を動員して白河を攻撃し赤館を落し鹿子木を消滅してしまった。

家紋は左三ツ巴と、木瓜と略粒子引両を用いた。左三ツ巴は白河家本来の紋、木瓜は祖先小山小四郎朝政が用い

たもの。略粒子引両は頼広庶子につき粒子引両の中から一本を引いたものである。

天正五十六年頃かと思わるゝが二階堂に備える為かとも思わるゝが白河晴綱代理義親から小針館主と物見館主を兼帯する様達しがあり物見館の方が便利故物見館に引越した。物見館は総面積が五十四町六反八畝十八歩で大きい方である。本丸が一番高い所に在り各家屋の密集の部は隣組により通報出来る様に成つて居つた。先づ小針館には畠山十郎左エ門義信、小林五郎左エ門義基、近藤主馬宣清、木元玄播重晴を筆頭に若干の家臣を残し物見館の方には小河清兵衛祐元、松尾遠江広義、田子刑部道頭、藤島儀右エ門、小針左馬介勝房等を連れて移り備えを敷重にした。

天正十二甲申年諏訪大明神ヲ勤護ス祭神は健御名方命である。

物見館内に小さな池がある。頼広毎朝の様に駒を走らせ館内を廻りこの池で馬に水を飲ましたと云伝う後俚人この池を駒の口池と云う。

天正十六年六月十八日死ス

法名 幽峯結頼大禪定門

甘露寺墓地

② 政頼

右京

天正十六年六月父頼広の死後小針館主、物見館主を兼ね

天正十八年八月白河城主白河義親が豊臣秀吉に城地を没収さるゝに及び当然小針館及物見館も没収の運命に会うて館を廃止する。約六十人の家来もそれぞれの職についた。

元和元 卯年七月十八日死ス

甘露寺墓地

法名 清乘良海大禪定門

朝広 土佐

頼綱 丹後

⑧ 頼道

喜左エ門

泉庄内野郷中畑村へ移ル、移住に付て頼広の残せし刀のうち備前国長松之住、祐定刀二尺二寸を長男頼通に。関の兼元刀一尺八寸（俗に関の係六）を弟権平頼宗に記念として遣し頼通を連れて中畑へ移った。

寛永二 丑年七月十五日死亡

澄江寺墓地

法名 峯林道西大禪定門

妻 不明

広光 志右エ門

元豊彦治郎

彦治郎元豊親が殺サレタ時ハトノエノ為ニ城中ニ在リ  
家来三城目出身ノ竹石係兵衛その子喜平トシ人デ赤沼  
街道デ出会仇ヲ討ツ。寔宝三年五月七日也

白河城主本多下野守忠平へ仕官し知行二百石  
白河藩士小路居住、延宝元年八月富永弥太郎

ニ殺サル

④ 頼通

七左エ門

父に連れられて中畑村へ移ル。寛永十八年卯月吉日荒木高綱より小笠原流獻立之次第を許さる。

元禄七甲戌年三月朔日死す

澄江寺墓地

法名 晴閉同円大禪定門

妻 貞享四年三月五日死す

澄江寺墓地

法名 月庭長春禪定尼

頼宗 権平

頼久

弥左エ門

頼重

弥左エ門

女子  
政綱 小山弥左エ門

頼利 清左エ門

頼生 係右エ門  
中畑小針へ  
頼信 弥市右エ門  
号酒井

頼常 嘉蔵  
中畑小針へ  
頼次 小針弥右エ門  
酒井喜三郎

頼忠 小針係右エ門  
頼近

⑤ 頼直

七左エ門

幼名惣四郎中畑村庄屋となる当家系譜に手をつく。

宝永七年二月二十二日死 澄江寺墓地

法名 覚証道円居士

妻 宝永元年甲申年十一月七日死 澄江寺墓地

法名 寒嶺常心大姉

⑥ 頼治

七左エ門

幼名伊左エ門 中畑村庄屋を勤む。正徳三年六月八幡神社に手洗鉢を奉獻原型亀、小針七郎右エ門、小針伊左エ門とあり

正徳五年九月八日死ス 澄江寺墓地

法名 視峯自照居士

妻 正徳四年三月十日死ス 澄江寺墓地

法名 昌室貞久大姉

⑦ 頼章

七左エ門 別名喜内頼章

幼名伊左エ門中畑村庄屋御蔵米問屋となる。享保十三年八月十五日蕪木造酒丞宣次事俗名曾根六左エ門黙岑光房より吉田流弓術秘歌一卷を許さる

寛延四年辛未年七月二日死ス 澄江寺墓地

法名 栄室浄繁居士

妻 享保十八年七月十七日死ス

法名 蘭室貞香大姉 澄江寺墓地

女子 享保四年五月十六日死ス 澄江寺墓地

法名 無相童女

啓之助 正徳四年三月二十六日死ス 澄江寺墓地

法名 離相童子

伊十郎 享保二酉丁五月十五日死ス 澄江寺墓地

久左エ門 宝暦二年二月下新城村が新たに出来て出庄屋

⑧ 豊知

七左エ門 幼名定八 中畑村庄屋御蔵米問屋を勤む

宝暦八年戊寅二月七日広瀬兵藤政光より日置流雪荷派弓術奥儀全四巻を許さる。宝暦九年八月八幡神社へ献燈二基。分家小針孫右エ門頼生夫婦並に小針嘉藤頼常来り真坂の旧主白河義親の子孫村広へ仕官の望みあって豊知に依頼と同時に豊知の二男として入籍す。而之小針頼生及其の子嘉藤頼常の仕官の望みある旨書状にて白河家に申入る村広君非常に嘉び召抱へる旨返事あり宝暦五年四月の事也

去月中小針孫右エ門下之節者芳黒令披聞候

弥無恙之旨珍重候我等堅固有之候  
遠境□給不浅次第候恐々謹言

四月廿日

白上野

村広 花押

小針七左エ門殿

御状令披見候小針嘉藤儀父同苗孫右エ門

依頼御当家江被召出候に付右御礼

上野様御機嫌被相同度旨委細御紙面

之趣遂披露候処遠境念入之書御

祝着被成候此旨私共より宜申遣由

依仰如是候恐々謹言

四月廿一日

佐々木右内 花押

遠藤勘左エ門 花押

小針七左エ門殿

別而申進候弥々御堅固之旨珍重存候小針嘉藤

事御当家江如願被召出候に付而今度罷下

当分為養育父孫右エ門○○○○○別事添

可遣旨品々被仰越少々疎意無之候間可安心候  
被入御遠境御音札之趣忝存候  
猶期後慶候以上

四月廿一日

佐々木右内

小針七左エ門様

遠藤勘右エ門

去月小針孫右エ門罷下候節御神書被下忝拜  
見候如御仰御上茂無御故障被成御座候御  
紙面之趣則披露之処念入之義思召候此旨  
宜申遣由仰被聞候就而其御地皆々様御  
堅固成御座候由珍重存候当方も無別条  
罷存候且先年江戸表江藤登候砌ハ於矢  
吹村ニ度々懸御目大慶候弥々此度小針孫  
右エ門悴嘉歳事願出之趣も通此方御家中  
に被召出候御知行も不少被下置而只今頃  
別家住居に候間貴様にも愈々御悦可成候  
且私杯も別而添致様仰聞其段は少し御氣  
遣ナサレ間敷別而相變御座ナク候早々  
申進候私事モ来冬中其地ニモ罷出申ヤモ相知

不候間雨風罷有候共乃尋致種御物語可致  
存候右之趣御家内皆々様に宜敷頼入度手  
前よりも恐縮に候共如期候

月二十二日

和知源左エ門

小針七左エ門様

広頼 花押

- 一、宝曆十三年正月米三俵下レ置かる
  - 一、明和元甲申年十一月八幡神社へ献燈一对
  - 一、明和六年九月より二人扶持を受ク
  - 一、安永七戌戌年壬七月二日死ス 澄江寺墓地
  - 法名 小光院雲山卓松居士
  - 一、妻明和五戌子年七月十四日死ス 澄江寺墓地
  - 法名 照有院来参俊意大姉
  - 一、須乗から来りし小針孫右エ門頼生の妻
  - 明和五年正月八日死ス 澄江寺墓地
  - 法名 浄安妙心大姉
- 源之助 延享四十卯年十月十八日死ス 澄江寺墓地

法名 幼泡童子

⑨  
正定

七左エ門 幼名伊左エ門又へ定四郎

頼章の三男にして兄豊知の準養子となる。中畑村庄屋御蔵米問屋を勤む、三人扶持を受く寛政三年十一月小林五郎左エ門勝辰より日置流印西派弓術秘歌神道卷外一卷を許さる。

一、寛政四年四月駒附格を申付らる

一、安永五年三月居宅を新築す。旧居宅のカマドの下から人体に似たる石出づ、安永五年三月二十四日後火難除けの地藏尊として井戸の辺に祭る

一、涅槃石像一幡を澄江寺に奉獻す。

寛政十三年十二月二十六日死ス 澄江寺墓地

法名 積雲院善翁浄繁居士

妻 享和二壬戌年八月三十日死ス 澄江寺墓地

法名 慶林院松室貞寿大姉

音吉

中畑村へ分家シタルモ没落ス

⑩  
豊住

安正同人 正定長女タキの婿也

笠石村庄屋小貫喜左エ門の倅

一、寛政五年十月庄屋駒附格三人扶持相統申付らる

一、寛政十年駒附代役申付らる

一、寛政十二年申四月金貳百疋下さる

一、享和元年御歳米附出御回米附出役運送馬取計役申付かる。

一、享和三年四月十八日金貳百疋下さる

一、享和四年二月大庄屋格申附らる

一、文化四年四月二十八日金百疋下さる

一、文化五戊辰十一月九日死す 澄江寺墓地

法名 高源院通宝常源居士 行年四十三才

妻 タキ

弘化元申辰年三月二日死ス 澄江寺墓地

法名 高照院心操貞鏡大姉

一、黒田稲臯筆麿の図二幅は豊住伝来と云う

女子 寛延元年戊辰九月十一日死す

法名 菊相善童女 澄江寺墓地

女子 寛延三庚午年九月二十六日死ス

法名 秋露童女 澄江寺墓地

女子 宝暦三壬申年九月十九日死ス 澄江寺墓地

法名 尊皇童女

女子 マサ

中野目村郷土内谷太左エ門倅豊八に嫁す

寛政十年正月浅川騒動に会い庭前の松を切られ中味を空洞にしられ又安永五年に新築の家屋の柱、なげしをマキワリ如きもので切られ、床の間をもっともはげしい勢で傷つけてしまった。

房成 ⑪

米吉 豊住長男 中畑村庄屋御蔵米問屋を勤む

澄江寺へ幽霊像一幡を奉獻す

文化十四年丁丑年三月一日死ス

澄江寺墓地

法名 恭心院全学了提居士

妻 文化十三丙子年七月廿四日死ス

澄江寺墓地

法名 即心院小針了幼大姉

惣十郎 寛政十年戌十一月二十三日死ス

澄江寺墓地

法名 清玉日光童子

庄治 享和三癸亥年四月六日死ス

澄江寺墓地

法名 小針院莊葉色殿善童子

文治 文化十四年五月二十四日

澄江寺墓地

法名 本源知性美童子

豊章 ⑫

周平棚倉町年寄井上茂右エ門の倅

豊住の甥にして房成の従弟也幼少より来りしと云う幼にして小針性を用ゆ

雅号を酔月と云う。中畑村庄屋御蔵米問屋を勤む。文政六年十一月迄に春兆軒植田左平次伊次より大坪流馬術の免許六巻を贈らる。

文政十年八月朔日石川郡高田町村庄屋鈴木庄吉と二人で石川、田村、白川三郡八十五ヶ村（殿料）を代表し第一代将軍徳川家斉へ直訴せんとして容意に将軍出馬せざるにより御老中華頭大久保加賀守忠直登城先へ駕籠訴し即刻召捕えられ御支配水道橋御役所へ引渡さる。その後直ちに勘定奉行遠山左エ門尉景晋に引渡された。遠山

奉行は一応寺沢忠三郎近藤鉄平及び足輕を遣し受取らしめ西大久保新谷町上洲屋源助へ宿あづけ翌一日十一時頃源助が付添い奉行所白洲へ出頭足輕二人が庄吉周平の後にひかえ奉行遠山左エ門尉景普は上下を着用に及び中央上座に座り奉行の後には近侍が警備し手代の河合次郎作は縁側に詰めて居る処で奉行から「奥洲石川郡、田村郡白川郡村々惣代高田町庄屋庄吉、中畑村庄屋周平等大久保加賀守へ駕籠訴を致したが是は差越願と云うもので取上る事は出来ぬ依而この訴状は返すから早々国元へ戻るよう」との事で小針家に残ったものである。若しこの時大久保加賀守又は遠山左エ門尉が取り上げになっていたとしたら庄吉、周平は勿論その妻子迄も当時の規定に照らして磔の刑に処せられた事であろう。郷里へ帰った二人はそれぞれ又々召捕えられ手鎖りをかけられて又々入牢申付たが江戸で許されたものが又々地方で処分するも变故許されてそれぞれ帰宅して又々庄屋を勤めた。

天保八年十一月棚倉城主分家松平車次郎康済に中畑村外六ヶ村知行所に仰付けられ第二代目の代官に申付けられたが小針家に災のかからぬ様にとの考えから、井上、尾川齋藤の氏を名乗り又名は啓輔理兵衛を用いた。

代官となるや多田武左エ門の後を受けて陣屋の建築に従事し又庭園と牢屋を建つ、その後不正の儀ありとて自らの作つた牢に入れられる。番人良藏の助けにより屋根を破って脱走し江戸に趣く。浅草に於て公議役人に召捕らる。罪科の条々申開き相立ち再び中畑代官として下り矢吹新田村の間屋渡辺惣兵衛宅に着く。中畑陣屋下の役人一同の出迎で中畑に入る。而して人望既に地に落ちたるを覚り漸くにして其の職を退く。

この後松崎村庄屋小室仁平南部藩士齋藤三平と共に水戸中納言を勤かし事業を企てんとして果さず三人北海道に渡る。函館に於て而大に馬鈴薯を作り是で酒を醸造し外人に売込まんとして大失敗に終る。是よりこの三人を奥の三平と呼ぶ者ありしと云う。

嘉永二年豊章一人で矢吹村佐久間伊右エ門より多額の金子を借り受け出羽国村山部中山大滝銀山開発に従事し又失敗に終り日光に行き宮司に取り入り小葉主税の家に世話に成り全国大名を相手とし東照宮権現の威光により無尽を開きたるも事公議に聞え持つての外のこととし捕手を差向けらる。豊章此処にも居られず芦野辺に居りしも後白河馬町に居りて文久式年に没す。中野目村円谷善助翁の話によれば「豊章の伝は蒲生重章著 近世偉人伝

にありと云う。(明治十五年頃の発刊)

文久二壬戌年八月二十六日死ス。墓地白河関川寺

法名 信迎院同法性身居士 行年六十八才

妻カツ 滑津村年寄格水野谷猶吉の妹 前名カヨ 明治十八年五月十四日死ス 墓地白河関川寺

法名 信性院妙法禅心大姉 行年七十八才

・豊章は文政六年七月十五日峯林道西大禅定門の二会忌を行う。(二会忌は二百年のとなり)

・松平軍次郎康済より歌を贈らる。

光澄

発右エ門 幼名秀次 雅号を子孫 文化元申子年十一月十七日生

豊章の長女ミカの婿也、烏山大久保藩士南畝武助光教の倅にして故あって大谷地村庄屋小針佳藤太(後の中畠家)に養育される。天保二辛卯年九月渡辺正助綱恭より種田流槍術免許を一巻を許さる。

天保八年より中畑村庄屋駒附役御蔵米問屋を勤む

安政六未年十一月二十八日釜山へ稲荷明神を観請す(祭神豊文比咩命)

酒井抱一筆牡丹絵を松平石見守(万太郎)康英(康直)より賜わる。

南湖落雁(谷文兆筆)は浅川代官島田帯刀より賜わる(手代松沢繁右エ門持来、常盤家の土蔵で書きしものと云う)

銀製甲子大黒天(甲子貨)は公議代官本山幾四郎より贈らる。

明治十四年四月二十二日死ス 澄江寺墓地

法名 覚性院趙門一無居士 行年七十八才

妻ミカ 天保四年 巳四月二十四日 澄江寺墓地

法名 嶺雲院全身慧光大姉 行年二十一才

後妻トク 滑津村問屋野木安右エ門光家の娘にて母は矢吹村庄屋笹山久右エ門の娘

明治十五午六月六日死ス 澄江寺墓地

法名 智性院寂光慈静大姉 行年六十四才

政治 白河町大庄屋格金子茂左エ門の養子となり襲名す

又太郎 天保三年壬辰七月十七日死ス 澄江寺墓地

法名 曉露山顛曉禪童子

三郎 天保八丁酉年二月十日死ス 澄江寺墓地

法名 春光宗英童子

七郎 天保十四年癸卯年三月三日死ス 澄江寺墓地

法名 明雲童子

女子トリ 足利町医師小林尚頭を婿とし井上性を名乗り分家す 今市にて死す

⑭ 文郁 七左エ門 幼名文治 光澄の長男也天保五年甲午年十二月十三日生

中畑村庄屋駒附役御蔵米問屋を勤む。雅号を蘭溪、景山、松迺居、南山、南缶、松憲と云い、書画を好む。殊に画を服部波山の門に学ぶ。明治五年三月磐前県庁より当分是迄之通り役儀申付けらる。

明治五年四月第五大区十四小区中畑村外十一ヶ村区长拜命

明治六年二月十四日磐前県より第五大区小十三区小十四区小十六区合区副区长拜命川辺会所拜命

明治七年一月磐前県より第五大区小十区副区长拜命川辺会所勤務

明治七年九月二十七日磐前県第五大区小十区扱戸長拜命川辺会計勤務

明治七年十一月石川郡川辺会所廃止され石川会所に合併同時に同会所詰戸長申付けられ石川勤務、是より河野広中と親交あり明治十一年四月十二日福島県議員に当選す

当家は豊住代より困窮し初め光澄代最も甚し、文郁夫妻は醬油の譲造を創め日夜営營家政の快復を図れり依而後世この二人を小針家中興の祖と称す。豊住伝来の黒田稲卓筆鯉の図豊章困窮のあまり一幅を質に入れて流してしまつた。文郁代になり妻ヤス矢吹の大野左市方にあるをつき止め大金を出して密かに求めて現存するに至つた。

明治三十四年辛丑初酉の日稲荷山に遊び婦宅後病を得て死す

明治三十四年辛丑年五月十日死す

澄江寺墓地

法名 大典院恵林淨園居士

行年六十八才

妻ヤスは棚倉町年寄役一条藤助の娘で天保十二辛丑年三月五日生れ

大正三甲寅年十二月二十三日死す

澄江寺墓地

法名 淨相院廓室妙然大姉

行年七十四才

周次

光澄二男体巨大にして豪放、嘉永六年ペルー来朝の砌り黒船征伐を志し江戸へ登り松平石見守邸に宿す。江戸見物として只一人歩き廻り江戸川堤を通る会々武士二人に会す。自らを試さんと物言はずに租付けばたちまち川中に投げらる。漸くにして松平邸に戻る。石見守是を聞き大に驚き其の不心得を愉す。数日にして夜半火事あり周次早速飛び起き邸内の火見講に登る。講には既に人ありければ邸内の下人と思い方言を用い租なる言葉にて模様を問う。然かも返事なし、尚ほ語を荒げて糺問すること数言、暫くにして穏かな言話で「周次其の方にはわかるまいな」と云う。この時初めて石見守なるを知り驚いて其の夜の中に中畑指して逃げ帰ると云う。

この後嘉永六年六月品川沖に御台場を設くる事になり中畑陣屋支配下より人夫四十人を指出す様に成つた。総監督は円谷春平で人夫監督として兄文治の代理として周次江戸へ登る全員松平邸に泊し品川に通う。

人夫の人々毎日の仕事に疲れ朝起るものなし周次思ふ様四十人を一人一人起すは容易ならず棒枕に如がずと即ち長さ三間位の棒枕を数本作り是を枕として寝かしむ朝になれば棒鼻を力まかせてたたくと人夫直ちに起ると。

中野目村郷士円谷善左エ門愛章の養子となり円谷善右エ門宗孝と改称す

女子ナカ 中畑村問屋遠藤七兵衛に嫁す

岩太郎 光澄三男根田村庄屋永山利助光知の養子となり永山郡治利森と改称す

豊彦<sup>15</sup>  
東五郎

光澄四男也兄文郁子なきにより準養子となる弘化元甲辰年十二月八日生れ。

俳句を好む。雅号を松風庵、豊哉、又は春野と云う。

明治六年七月磐前県庁より中畑村、中畑新田村両村伍長拜命

明治七年二月中畑村、中畑新田村両村戸長を磐前県庁より拜命

明治十一年一月十七日中畑村用掛を福島県第九区会所より申付らる。

明治十一年六月十二日大畑村用掛兼務を申付らる。

明治十二年三月二十七日中畑村大畑村戸長を福島県庁より拜命

明治十二年二月二日右戸長辞職

明治十四年三月二日中畑村大畑村両村戸長を福島県庁より拜命

明治十五年六月八日右戸長を辞職

明治三十年十一月二十日西白河郡会議員に当選す

明治三十五年秋閑院宮載仁親王殿下(少佐)は従者騎馬武者三十五騎を随いて習志野を連れ仙台大演習場に向  
わせらるゝ途道出迎いとして当家族一同橋の上に出でし者共をふりむいて「是は珍らしい松である。(御越の松  
と名付けるがよかろう)との御言葉を賜わったと云う。これ以後「御越の松」とも呼ぶ。

この頃は勿論板に壁の塀で土手の上を人間の歩ける位の空間があり塀の外に松の枝が出て居ったので御越の松と  
呼んだ事ならん

明治三十九年丙午正月二日死ス

澄江寺墓地

法名 覚潮院東雲惠海居士 行年六十三歳

妻タキ 踏瀬村庄屋前内他十郎義方の娘 嘉永四年辛亥九月九日生れ

明治二十一年戊子之月七日死す 澄江寺墓地

法名 妙性院青顔柳葉大姉 行年三十八才

後妻ハン 中野目村郷土円谷甚左エ門愛彰の娘 母は河部藩士三沢舎人の二女ゲン

昭和十四年八月四日死す 澄江寺墓地

法名 妙徳院観麟喜鳳大姉 行年八十八才

栄治 光澄四男 弘化之丙午年十二月二十五日生れ。十七才の時女帯其他日用品等盗難に会う。栄治思う様賊は中畑

新田村の八幡神社裏山に居るらし。行きて盗難品を取戻さんと決心し農夫姿になり鎌を持ちて出掛く、賊は小雨降る八幡裏山に荒庭で小屋を作り赤鞆の大刀を側に置き二人して焚火をなす栄治勇を奮って近づき「貴様等早々に退去すべし左なくば吾大声をたつべし役人村民共の此山を包囲するも間近なり」と賊共信ぜぬ様子なるも栄治平然として退去を急ぎ立つれば不安にや思ひけん急ぎ退散す即ち小屋をこわし盗難品を持帰る。

白坂町年寄役亀山弥五右エ門重直の養子となり亀山弥之助重彦と改称す。

七郎 嘉永六 丑年二月二日光澄五男に生る。上新城村庄屋岡崎平右エ門光徳の養子となる。

八郎 光澄の六男に生る。安政四丁巳年七月二十四日死す 澄江寺墓地

法名 碧輪善童子

新之助 光澄の七男に生る。

明治元戊辰年十一月十日死す 澄江寺墓地

法名 岩恵善童子

倉治養子 根田村庄屋永山郡司利昇の倅にして石川郡石川町鈴木要助の養子に成る。

女エイ 養女 根田村庄屋永山郡司利昇の娘にして東白川郡高城村吉成賢一郎に嫁す

女トメ 元治元甲子年十二月三日生れ。小針ヤスの姪と云う

須賀川町永田治兵衛の娘にして神田村藤井文之助に嫁す

文治 豊 の長男として明治七卯戌年二月二十四日生る。素州と号す明治二十年四月白河町太平熱に入る。

明治二十二年四月福島県尋常中学に入學

明治二十四年四月同校特待生に選定さる。

明治二十四年十二月東京物理学校東京数学院独逸協會学校等に歴學す

明治二十九年七月東京帝国大学農家大學撰科に入り農科及び農芸化学を專攻す

明治三十一年十二月八日盲腸炎に罹る

辭世 きのう迄學びの友と遊びしを きょうの旅路は一人なりけり

明治三十二年五月二日死す 澄江寺墓地

法名 大学院恭博文鏡居士 行年二十六才

明治三十四年文治の親友小西重直從兄詣内互等の尽力で詩歌文章を集め小冊子を刊行す。是を殘紅力と名付く。

題字は河野広中翁也

⑬ 静雄 明治 年丁丑一月十四日豊喜の二男に生る。

母は踏瀬村庄屋筋内他十郎義方の娘タキ也、幼にして母を失い須栗村酒井にて養育さる。雅号を松声又は鉄梁と云う。明治三十年福島県尋常中学校を卒業す。在学中は長田五兎先生の世話になる。大藏参与官下坂藤太郎氏の遇により明治三十年五月十七日大藏省に勤務属官たり。兄文治病にかゝり快復し難きを察知し明治三十一年一月十七日職を退き帰郷す。

明治三十二年五月文治死するに及び家督相続す。

明治四十四年十一月二十四日西白河郡會議員に當選し、大正十二年三月二十六日郡制廃止まで三期十二年間相勤む。大正二年二月有限責任中畑信用購買組合を同志と共に設立し自ら組合長となり大正十四年十二月病に斃るゝ迄其の職を奉ず

大正十四乙丑年十二月十八日死す 澄江寺墓地

法名 恒徳院真詮静雄居士 行年五十才

妻ヨシ 白河本町石岡忠蔵重礼の長女

明治十三年一月十四日生れ 母は阿部藩士勘定奉行村社喜三郎保之の娘テツ

昭和十三年二月九日死す 澄江寺墓地

法名 光徳院有真妙隣大師 行年五十九才

### 連

明治十二年九月十四日豊森の三男に生る清州と号す

明治三十三年二月改玉社土木学本科卒業

明治三十五年一月順天中学第四学年三学期へ編入し明治三十六年三月三十一日同校卒業

明治三十六年改玉社土木学卒業同時に研究科に入り明治三十七年六月同校卒業称来農商務省に入り同省技手たりしが病に斃る

明治三十七年申辰十二月八日死す 澄江寺墓地

法名 樹心院信岳宗正居士 行年二十六才

### 省至

明治十四年十一月十四日豊森の四男に生る。幼にして母を失いしかば白坂亀山家に養育さる、安積中学卒業後盛岡高等農業学校獣医科に入り明治四十一年三月卒業、同年四月宮崎県児湯郡立農学校教諭に任ぜられ大正四年五月二十一日正八位に叙せらる。

大正七年三月該校は宮崎県立高鍋農学校と改称、同時に同校教諭に任ぜられ大正七年六月二十八日内閣より高等

官七等を以て待遇せらる。

大正七年九月十日従七位に除せられ大正九年七月二十七日内閣より高等官六等を以て待遇せらる。

大正九年九月三十日正七位に叙せらる。

大正十二年五月二十九日内閣より高等官五等を以て待遇せらる。

大正十二年十月六日宮内省より従六位に叙せらる。

大正十二年十月九日職を退き帰郷後分家す、後石川中学校に奉職、その後昭和五年四月滑津原に公民学校を創立したるも昭和七年七月七日病に斃る。

法名 一真院黙省至道居士 行年

妻福 神田藤井久之助の娘

女フク 中畑村遠藤正見に嫁す

弥太郎

⑰

静雄の長男にして誠に愚どんの生れつき明治三十四年四月一日誕生、専修大学計理科中退

大正十五年一月二十八日有限責任中畑信用購買組合理事組合長

昭和十九年四月五月中畑信用購買販売組合改組に付退職

昭和十九年四月六日中畑村農業会誕生に付き会長就任

昭和二十年四月七日中畑村農業会長退職（追放による）

昭和二十八年四月中畑村農業協同組合理事組合長就任

昭和四十三年五月四日中畑農業協同組合組合長退職

昭和二十八年四月中畑農業共済組合長に就任

昭和三十一年三月二十日矢吹農業共済組合と中畑農業共済組合と合併中畑農業共済組合長退任

昭和三十五年三月矢吹方部七農協による（矢吹・中畑・三神・滑津・吉子川・関平・泉崎）矢吹方部農機具サービステーション創立され理事長に就任

昭和四十三年五月四日矢吹方部農協農機具サービステーション理事長退職

昭和三十三年五月福島県厚生農業協同組合連合会理事に就任

昭和三十七年五月福島県厚生農業協同組合連合会理事退職

昭和三十七年五月福島県厚生農業組合連合会参与に選任さる。

昭和四十一年五月福島県厚生農業組合連合会参与解任さる。

昭和四十一年五月福島県中央会理事に就任

昭和四十四年五月二十七日福島県中央会理事退任

昭和四十一年五月福島県厚生農業協同組合連合会理事に就任

昭和四十四年五月二十七日福島県厚生農業協同組合連合会理事退任

昭和三十六年四月一日福島県野菜価格補償協会が創立され理事に就任

昭和四十一年七月福島県果実価格補償協会と野菜価格協会と合併し福島国青果物価格補償協会が創立され理事に就任

昭和四十三年五月四日福島県青果物価格補償協会理事辞任

地方自治体関係

昭和十四年四月一日中畑村警防団長拜命

昭和十五年七月十五日中午畑村警防団長辞任

昭和十五年二月一日中畑村長就任

昭和十九年七月日辞令を用いず奏任官待遇を受く

昭和二十年二月中畑村長退職（マッカーサー司令官による追放）

昭和三十年四月矢吹町監査委員に選任さる。

昭和四十六年四月二十八日矢吹町監査委員辭任

昭和三十一年七月矢吹町文化財専門委員を委嘱さる。

裁判所関係

昭和七年十月一日金銭債務臨時調停委員に選任さる。

昭和十六年十月三十一日金銭債務臨時調停委員解任さる。

公立岩 病院関係

昭和十五年七月公立病院議員に選任さる。

昭和十七年五月公立岩瀨病院議員退職

昭和二十七年四月公立岩瀨病院議員に選任さる。

昭和三十年五月公立岩瀨病院議員退職

羽鳥ダム関係

昭和十五年八月羽鳥人造湖築造期成同盟会が矢吹・鏡石・スカ川・中畑の人々により誕生し中畑選出の理事となる。

昭和十八年九月に関係各村に於て耕地整理組合設立の運びとなり理事解任

記念章関係

昭和十五年十一月十日記元二千六百年祝典で記念章を受く

賞罰関係

昭和二十二年十一月十四日公職に関する就職禁止退職等に関する勅令による仮指定を受く

昭和二十六年六月二十日公職に関する勅令により指定理由取消の通達に接す

昭和四十四年五月三日農業団体功勞者として県知事より表彰され銀盃壹個を受く。

昭和四十七年四月二十九日勲五等に叙せられ瑞宝章を賜わる。

昭和四十七年五月以後矢吹町役場、中畑農協その他の人々より叙勲記念碑を贈らる。

妻八重 鏡石町仁井田医師滝田貫之の二女、母は志乃明治三十五年五月生れ。

昭和四十一年十二月十五日死す 澄江寺墓地

法名 安照院浄雲妙輪清大姉 行年六十四才

女ミツ 東京都医師国分一郎に嫁す。

多二郎 日本大学経済科に入学せしも中退し大橋和多理氏の紹介にて台湾の郡役所に居りしも病を得て帰郷シスカ川

県南病院に入院死す

昭和十六年三月二十五日死す 澄江寺墓地

法名 青雲院多聞澄一居士

雄三郎 初め東京齒科医学専門学校に入学せしも病を得て帰郷、其の後体回復後早稲田大学経済学部に入學。卒業後

朝鮮大邱稅務監督局に入り勤務中旧伊達家一門白河眞風家を相続し白河穠子と結婚す

謙四郎 早稲田大学経済学部を卒業後仙台市菊地勝助の養子となり千代と結婚す

女重子 白河市八龍神辺見英一に嫁す